Ⅲ．分担研究報告１

厚生労働行政推進調査事業費補助金
（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）
令和３年度 分担研究報告書

サリドマイド胎芽症患者の健康、生活実態の把握及び支援基盤の構築に関する研究
（20KC2005）

研究分担者　　日ノ下　文彦　　帝京平成大学健康医療スポーツ学部看護学科　教授

研究要旨
本年度から本研究班の研究代表者が日ノ下から田辺に代わった。そのため、筆者（日ノ下）はこれまでの研究班の活動や研究、事務処理等を後任に引き継いだ。新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 流行のため、期待しただけの成果は得られなかったが、本研究班の研究や活動のポイントを無事伝授できたので、今後の発展が期待される。

A．研究の目的

厚生労働省により組織されたサリドマイド胎芽症（以下、サ症）に関する研究班は、この班で第 4 次研究班となり、第 1 次研究班から数えると既に 10 年が経過した。そのうち昨年度までの 7 年間（第 2 次および第 3 次研究班と第 4 次研究班の 1 年目）は、筆者が研究代表者として研究班の活動を牽引してきた。しかし、本年度から代表者は田辺晶代先生に替わり、筆者はこれまでの経験と実績を踏まえ、研究活動の統括と推進を担う新班長を支える立場となった。

しかし、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の流行が続くため、欧州のサ症専門家と対面で情報交換するための出張はもちろんのこと、国内の研究者同士もしくは被害者を交えた対面活動でさえ、実行するのが難しい情勢であった。そこで、本研究班の活動の軸である人間ドック健診や他の活動が円滑に進むよう新研究班代表者への情報提供や引継ぎ、補助、支援を行うことにした。

B．研究方法

① 研究代表者（研究班長）業務の引継ぎ

サ症研究班の活動や研究の骨子を新研究班長に伝え、今後の活動に必要な資料を選択して提供した。また、2021 年 7 月 2 日の研究班会議で昨年度の活動を中心に総括し、班長や他の研究班員による本年度の活動がスムーズに進むよう配慮した。さらに、「新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の基本的知識と生活上の対応－サリドマイド被害者の皆様へ－（第二版）」を作成すると伺っていたので、第一版の内容を引き継いだほか、新型コロナワクチン接種に関する注意事項の内容についてアドバイスした。

② 関西圏における人間ドック健診先の確保

当初よりずっと西日本の人間ドック健診を担ってきた（独）国立病院機構京都医療センターが、2022 年度より健診センターを廃止し人間ドックを止めることになったので、研究代表者（田辺）の依頼により本研究班の研究協力者（栢森）と協議し、後継医療施設を選定した。

③ いしずえ講演会

公益財団法人いしずえの依頼により 2021 年 11 月 13 日、フクラシア東京ステーションにてハイブリッド形式の講演「サリドマイド胎芽症者の健康管理 － 老い楽を目指して －」を行った。

C．研究結果

① 研究代表者（研究班長）業務の引継ぎ

新研究班長にサ症研究班における人間ドック健診の方法やこれまでの研究班の活動骨子、報告書の内容などを引き継いだ。

2020 年度までの研究、活動を踏まえ、研究班会議（オンライン）で示した直近の主な活動は以下のとおりである。

・人間ドックの方法
・「サリドマイド胎芽症診療ガイド 2020」の英語版「2020 Guide for the Management of Thalidomide Embryopathy」の発行
・2nd International Symposium on thalidomide embryopathy in Tokyo (2019)の Proceedings の発行
・小冊子「新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の基本的知識と生活上の対応 ーサリドマイド被害者の皆様へー」の発行
・48th Annual meeting of the European Teratology Society (Virtual One-Day Meeting, 2020) における「サリドマイド胎芽症診断の手引き」オンライン発表
・「サリドマイドー復活した『悪魔の薬』」（栢森良二著, 2021）の出版
・リハビリテーション専門医による個別相談 計 4 名および外来受診（ドック健診受診者による後日受診）計 2 名（いずれも 2020 年度）
・股関節診療と同部の外科的治療（ドック健診後 NCGM 腎臓内科より紹介）1 名《日産厚生会玉川病院整形外科, 2020 年度》

なお、新研究班代表者を中心に小冊子「新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の基本的知識と生活上の対応 ーサリドマイド被害者の皆様へ（第二版）」が発行されたが、これは前年度に発行した初版が下敷きとなっている。さらに、その中の「VI. 新型コロナワクチン筋肉注射に関する注意点」の記述については、依頼を受けて筆者も校閲した。

② 関西圏における人間ドック健診先の確保

（独）国立病院機構京都医療センターの後継先として関西医科大学附属病院を選定し、研究代表者を通じて同院にサ症者の人間ドック健診を引き受けてもらうよう依頼した。なお、同院の関係者や管理者等の理解を得るため、2021 年 10 月 20 日、研究代表者に加え、日ノ下、栢森も参加して、関西医科大学関係者とオンラインミーティングを行った。ミーティングでは、サ症者向けの人間ドック健診の意義や実施方法、研究実績などについて説明した。その後、関西医科大学附属病院長の許可がおりて、2022 年度から人間ドック事業を引き受けてもらえることになった。

③ いしずえ講演会（2021 年 11 月 13 日）

ハイブリッド形式で「サリドマイド胎芽症者の健康管理 ー 老い楽を目指して ー」と題する講演を行った。講演で話した主な内容は以下のとおりである。

▶ 健康・生活実態調査結果 (2018) の骨子
▶ これまでの人間ドック健診の結果を踏まえた健康管理のポイント
▶ 一般向けの健康管理書である拙著「老い楽のすゝめ」の内容の解説と健康長寿を目指して生活していくコツの説明

D. 考察

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 流行の影響で、対面でのミーティングや活動、海外の専門家との交流が難しくなり、思うような研究や活動ができなかった。本来であれば、従来のように、新しい研究班長と一緒に渡欧してヨーロッパの主なサ症研究者、臨床家と交流をはかり、日欧の連携がこれまで通り進むよう取り計らいたいところであったが、それは実現できなかった。

しかし、本邦のサ症研究班は第 1 次研究班から第 3 次研究班までに積み上げてきた成果と実績があり、第 4 次研究班はその基盤の上に活動を続けていけるので、人間ドック健診にしろ、その他の活動にしろ、スムーズに継続していけるのではないかと思う。筆者は昨年度で研究代表者の任を終えたが、今後、本研究班がさらに発展しサリドマイド薬禍者の支援や健康増進に寄与することを期待したい。

E. 結論

本年度、前研究班長としての活動や研究、その他の知見を新研究班長に無事引き継ぐことができた。

F. 研究発表

該当なし

G. 知的財産権の出願・取得状況　（予定を含む）

該当なし